

- 2 ディーゼル排気微粒子によるマウス精子産生能力の低下作用
大学院生 小原麻智子
- 3 青森ヒバの香りの精神面への効果
－ EEG の変化による検討－
看護学科 村松 仁
- 4 3年間にわたる「雪国の健康」に関する研究の総括と残された課題
理学療法学科 岩月 宏泰
- 5 在宅障害者における積雪期の生活実態と危機管理意識
理学療法学科 前野竜太郎
- 6 過疎地域における訪問指導の効果に関する前方視的研究
理学療法学科 盛田 寛明
- 7 スポーツ外傷予防に関する取り組み
－1999年から2002年までの活動報告－
理学療法学科 三浦 雅史
- 8 部分的な温浴と交替浴が心血管反応に及ぼす影響
－身体組成からの考察－
理学療法学科 李 相潤
- 9 スリランカ国結核対策の現状
看護学科 山田 典子

シンポジウム：子どもの心を育む環境とは

家族のライフサイクルと家族機能

看護学科助教授 中村由美子

1. はじめに

我が国では少子・高齢化などによる家族の変動が著しく、家族の多様化による問題や援助が注目されてきている。育児不安や児童虐待など子どもを巻き込んだ家族の事件が増加する中で、看護においても家族援助の必要性が求められている。しかし、今までの看護における家族援助は、子どもに視点がむけられ、子どもを取り巻く家族そのものへの援助はあまり考慮されてこなかった経緯がある。1990年代にはいり家族看護学が看護の一領域として確立され、家族援助がより重要視されてきている今、家族全体をシステムとしてとらえて看護介入することが必要とされている。特に幼い子どもを育てている養育期は、家族のライフサイクルからみると、父親・母親役割を達成して家族のきずなを深める大事な時期である。そこで、養育期にある家族の家族機能の特徴を、青森県の家族を対象にした研究を中心に考えていきたい。

2. 研究の概略

平成13～14年に、A市の保育園および健診センターに來所した6歳以下の乳幼児をもつ家族を対象に、家族力学尺度を用いた質問調査を依頼し、回答後郵送してもらう方法をとった。研究協力を得られた454家族について、共分散構造分析を用いて家族機能モデルを作成した。

3. 家族機能モデルの検討

研究の結果から、幼い子どもを育てている家族の家族機能は、『家族間のコミュニケーション』や『家事』、『家族内ルール』の3つの概念と、個人としての「アイデンティティ」や「プライバシー」、「協調性」、そして「家族の絆」、「問題解決の方法」が影響を及ぼしていることが明らかになった。家族機能としてのコミュニケーションは、すべてのコミュニケーションが関係性を規定している(Watzlawick, 1967)といわれるほどその重要性については以前から述べられている。研究においても、子どもを育てている家族の場合、家族メンバー同士で話すというコミュニケーションが家族機能の中心的な役割を占めていることがわかった。また、養育期にある家族機能の特徴として家事の影響が大きいことが明らかになった。家事は特に母親である女性において負担が大きく、父親が手伝うようになったとはいえその時間や割合は少なく、母親が行う家事の役割分担やサポートのあり方については、今後とも考慮すべき課題といえよう。さらに、家族機能として、個人の「アイデンティティ」つまり、個別性の部分も家族機能の中では重要な部分を占めていることが明確になった。個別性は、家族という集団の中では個人的価値や自己表現が求められる傾向を示し、現代の家族の集団性が揺らいでいる一要因ともされている(森岡, 2000)。我が国の文化の特徴として、個人主義を強く主張しないことがいわれてきたが、個人の要素が家族機能に及ぼす影響の大きさを考えると、これからの家族は、家族という集団の中で個を大事にすることが、家族機能を高めることにつながることを示唆されたと思われる。社会の変化にともない、家族機能も変化してきている。家族のライフサイクルを考えると、新しい家族メンバーである子どもを受容して発達課題を達成するためには、私たち専門職者のサポートがより必要とされてきているのではないだろうか。